

巻末エッセイ

会長の「楽しいかな」根の研究（1）

私が根の研究を始めたのは、今から20年前、1986年（昭和61年）の春でした。その3年前に、日本海に夕日を望むN大学のテニス部、否、農学部を4年で卒業して、茨城県のつくば市にある農林水産省の農業研究センターに就職していました。当時の筑波は、大きな道路と原野の中に筑波大学といくつかの研究所があるだけで、近くにデパートもスーパーもなかったもので、生活を始めるのに必要な電気製品などは遠く土浦市まで買いにいかなくてはなりませんでした。またその頃は、農業研究の分野で長年、先端的な研究を行ってきた農業技術研究所が農業研究センターなどに再編された時期であり、また関連研究所の筑波移転の時期でもありました。

その昭和60年頃は、バイオテックという言葉が使われ始めた頃で、作物の品種改良が遺伝子技術により、すぐにも飛躍的に進むのではないかと夢をもって語られた時代でもありました。一方、新しい分野が生まれると古くからある分野は縮小されるもので、農業研究センターではバイオテックの研究室を作るために、私が所属していた芋類栽培研究室が廃止されることになりました。

サツマイモの研究をしていたある日、「バイオテックやってみるかね」と、指導を受けていたW室長に聞かれました。私にはよくわかりませんでした。研究室のN先輩や生理のセミナーでお世話になっていた先輩たちはバイオテックがすぐに役立つという見方には懐疑的でしたし、私自身、サツマイモの蔓を引っ張って葉っぱを調べるような屋外の仕事が好きでしたので「手先が不器用なので、圃場で栽培の研究を続けたい」とお願いしました。今考えれば吹き出すような理由ですが、そのようなことで麦栽培生理研究室に配置換えされることになりました。

「麦の栽培研究は昔からやられているので、おおかたの研究はすでに終わっている」というのは、私が最初に「麦の栽培で何を研究すべきでしょうか？」と尋ねた時にE室長が言われた言葉でした。当時の私のはのんきなもので、「それは良かった。仕事が少なくて楽ができるわ」と本気で思ったものでした。というのは、サツマイモの研究室では、千葉県や茨城県の生産地で当時、問題となっていたサツマイモ塊根裂開症というイモの品質劣化の問題を緊急対応的に研究することが課せられて、修士も出ていない私は、日々、困り果てていたため、「よかった。麦では楽できるわ」と思ったのです。そしてその時にE室長が続けた言葉は「麦の栽培研究で残っているとすれば、倒伏の問題、それと根は誰もやっていない」というものでした。その時の私には他に考えもありませんでしたので、その2つの課題の中から選ぼうと思いましたが、倒伏は稈の物性、力のモーメント、ヤング率など数学が出てきそうで嫌だなと思い、残ったのが根の研究でした。

芋類栽培研究室でやっていたのも塊根、そういえば根だったなど、勝手に運命的な出会いに仕立て上げ、その後、麦の根の研究をしていくことになりました。そしてそれが苦難の始まりでした。（つづく）